様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２１年５月２５日現在

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2006～2009
課題番号：１８４０１０３０
研究課題名（和文） インナーモスト・アジアにおける陶瓷貿易の構造

研究課題名（英文） The Studies of the Trade Ceramics in Innermost Asia

研究代表者
亀井　明徳（KAMEI AKINORI）
専修大学・文学部・教授
研究者番号：70204633

研究分野：東洋陶瓷史
科研費の分科・細目：人文学Ｂ・考古学
キーワード：モンゴル，カラコルム，陶瓷器，元代，青花瓷，ロシア科学アカデミー，考古学，インナーモスト・アジア

１．研究計画の概要

本研究は，元代を中心としたInnermost Asiaにおける陶瓷交易の構造を明らかにし，この広大な地域におけるモノの流通の実態を追跡し，新しく歴史像を構築することを目的としている。これらの地域から，中国陶瓷を主として，ペルシア陶瓷などが組み合わされて発見されていることは，すでによく知られた事実である。しかし，それらは断片的な資料として存在しているのが現状である。これを是正し，正確な考古学的情報として集成し，内外の研究者に公表することによって，東西交易史像を再構成することが本研究の目的である。

本研究は，次の3本の柱からなっている。

(1) 第1は，モンゴル共和国出土陶瓷に焦点をあて，とりわけカラコルム遺跡出土陶瓷資料の調査である。くわえてサーザンホトなど周辺遺跡出土品を調査し，比較研討する。

(2) 第2は，内モンゴル自治区・中国東北部・ロシア沿海州地域出土の貿易陶瓷について，生産窯が不明のところが多く，この課題を含めて，統一性をもった考古資料として再調査し，資料の集成をはかり，公表する。

(3)第3は，広大な交易範囲を示しているモンゴル帝国内において，その中核とみられるインナーモスト・アジアを，貿易陶瓷の流通をキーワードにして，日本・北東アジア・東南アジア・西アジアなど他地域と，比較研討し，ユーラシアにおけるインナーモスト・アジアの位置付けを明らかにする。

２．研究の進捗状況

カラコルム遺跡は，1947-48 年にソ連科学アカデミーの発掘調査がおこなわれ，このときに検出された資料は，現在，モンゴル歴史博物館とモンゴル考古学研究所，エルミタージュ美術館に分けて保管されている。これらについては，既にロシア科学アカデミーによって報告書が刊行されているが，現在の研究水準からみて，当然ではあるが，不十分な報告書である。私どもは，モンゴル内の研究施設に保管されている陶瓷器および小破片も含めてその全てについて悉皆的な調査（実測・写真・調書作成）を 3 年間実施し，その報告書を作成・刊行した。

(1) この研究助成を受ける前年の平成 17 年度において，予備調査を実施し，保管施設，その状況，調査の可否等について，モンゴル研究者と協議を重ね，調査協定書を締結した。

(2) 平成 18 年度，モンゴル国立歴史博物館保管のカラコルム遺跡出土陶瓷の全てについて，実測・撮影・調書作成をおこない，現地を踏査し，遺物の表面採集をおこなった。

(3) 平成 19 年度に，それによって得られた資料の事実報告と，陶瓷器の生産窯などの特徴を含めた研究を行い，『カラコルム遺跡出土陶瓷調査報告書Ⅰ(Ceramics Discovered at the Kharhorum Site Ⅰ)』(総 65 ページ)を刊行した。

(4) 平成 19 年夏，モンゴル国立考古研究所が保管するカラコルム遺跡および周辺遺跡出土陶瓷の全てについて，実測・撮影・調書作成をおこなった。

(5) 平成20年度において，モンゴル国立考古研究所保管陶瓷に関する『カラコルム遺跡出土陶瓷調査報告書Ⅱ(Ceramics Discovered at the Kharhorum SiteⅡ)』（総 106 ページ）を作成，刊行した。さらに，比較研究対象地域として，東南アジア地域のフィリピン・パンギル遺跡出土陶瓷の調査を実施した。
(6) 平成21年度において，比較する地域として東南アジア地域の中から，インドネシア・トローラン遺跡出土陶瓷が最もふさわしいと判断し，現在，調査を進めている。

３．現在までの達成度
②おおむね順調に進展している。
当初の計画したプログラムはほぼ達成し，上記報告2書によって一定の結論を提出した。カラコルム遺跡出土陶瓷については，上記の2研究機関保管品に加えて，2000年から開始したドイツ・ケルン大学チームの成果を加えて，上記報告書Ⅱにおいて，この遺跡出土陶瓷の全貌を明らかにし，今後の研究に資するところが大きい基礎的資料を提出した。
当初計画の北東アジア地域の陶瓷生産窯についても，吉林大学辺疆考古研究中心と協力して，出土品の撮影・調書作成をおこない，陶瓷専門研究者をわが国に招聘し，研究会を実施した。

４．今後の研究の推進方策
インナーモスト・アジアを中心としたモンゴル帝国の陶瓷流通史を，周辺地域と比較をすることによって，ここが草原に孤立した存在ではなく，同時代の他地域と，どのような異同点があるのかを明らかにすることが課題として残っている。代表者らは，すでに中国・日本・琉球などについて，詳細な資料集成をおこない公刊した。
そこで残された比較地域として同時代の東南アジア出土陶瓷研究が必要である。しかし，この地域において良好な資料は少ない。20年度において，フィリピン・パンギル遺跡出土品を調査したが，数量が少なく不十分である。この時期の東南アジア最大の遺跡は，インドネシア・トローラン遺跡（マジャパイト王朝首都）であり，ここから出土した景徳鎮窯産の元青花瓷・ベトナム青花瓷約8,300片がシンガポール国立大学に保管されており，これら全てを借用し，21年において実測・写真・調書作成を行い，同大学と共同して報告書の作成，公刊を実施している。これら資料との比較研討によって，インナーモスト・アジアの陶瓷流通史をユーラシア全体のなかで位置づけようと試みている。

５．　代表的な研究成果
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　8　件）
①白石典之・相馬秀廣・加藤雄三・A.エンフトル「モンゴル国フンフレー遺跡群の調査とその意義～元代「孔古烈倉」の基礎的研究～」国立民族学博物館研究報告33巻４号，査読有，2009，1-40頁
②亀井明徳「元様式青花白瓷の研究」亜州古陶瓷研究Ⅳ，査読有，2009，1-35頁

〔学会発表〕（計　6　件）
①柳澤明「ユーラシア茶文化への視点」宋代茶文化研究会・内陸ユーラシアにおける茶の普及と露清貿易第6回，2008年12月6日，東京学芸大学
②Kamei Akinori“ The Significance of Chinese Trade Ceramics from Ryukyu” Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures, 2008.11,6,London

〔図書〕（計　8　件）
①亀井明徳他“Ceramics Discovered at the Kharkhorum Site Ⅱ(カラコルム遺跡出土陶瓷調査報告書Ⅱ）” 2009,110頁
②亀井明徳他 “Ceramics Discovered at the Kharkhorum Site Ⅰ(カラコルム遺跡出土陶瓷調査報告書Ⅰ)” 2007,64頁

［その他］
亀井明徳「青花瓷の謎を追いかけて」読売新聞2008年5月6日朝刊